

〈映画や本で考える〉

## 教育学（不登校研究）のカナリア 山岸竜治著『不登校論の研究 本人・家庭原因説と専門家の社会的責任』

夏野いづみ

本書は、著者の博士論文「わが国における不登校研究の生成とその後の問題点に関する研究——本人・家庭原因説の批判的検討を中心に」（日本大学甲第 3828 号、2008 年 3 月 25 日授与）に加筆修正がほどこされて出版された「不登校研究及び不登校論の研究」の書である。

著者は教育学の研究者である以前に、歌人であり、短歌、そして、俳句や詩の創作を手掛けている。

青空のどこかにぶつけ傷付けた羽持つごとくうずくまるきみ

何らかの原因で心に傷を持つ青少年少女たちを詩的に表現するとこのような感じではないかと思わせる著者の短歌作品である。

著者と私は、著者が 20 代後半の頃、未来短歌会の歌会で出会った。著者の方が実年齢では年下であるが、近藤芳美選歌欄では著者の方が先輩である。繊細で、みずみずしく、ユニークな発想の作品を出詠し、注目を浴びていた。

近藤芳美を師として、月に一回開かれる歌会で、互いの作品の理解者として言葉を交わすようになり、著者が置かれている状況を少しずつ知るようになった。「あとがき」で述べられているが、著者は強迫性障害に悩まされ、高校卒業後、今でいうひきこもりの生活に陥っていた。

著者の短歌の魅力は、澄み切った世界観にあるが、それは著者の感性の鋭さが伺い知れる世界でもあり、著者の生きづらさにつながっているのかもしれない。精神医学や臨床心理の治療を受けた時期を経て、現在に至っている。

互いに短歌を離れた時期があり、音信が途絶えていたが、この度、本書が届き、著者が自分自身の生きづらさと葛藤しながら、研究を重ねてきた日々を思い、本書を上梓されたことに心からお祝いを申し上げたい。

教育学に関しては、大学の教職課程で触れたのみであるが、高校教師として、長期欠席の生徒に接することもあり、そのたびに思い悩んできただけに、本書から貴重な洞察を得ることができた。

なぜなら、本書が不登校の専門家に対する「批判の書」であるからだ。また、研究対象が不登校の専門家による文字資料に絞られており、文献レビュー法が用いられているので、専門外の読者にも理解できる内容となっている。そして、何より、「まえがき」で述べられている著者の不登校観——「不登校に関して、『こうすればなおる論』は存在しない、と私は思う」（4 頁）という見解に深い共感を覚えたからだ。

「まえがき」の最後に、不登校に関して「どういことが起きるとよいのか」についての思いが述べられているが、「それは、よい大人に十分に巡り合うこと、である。よい大人とは、人生の先輩であることを理由に年少者への責任を感じてしまうような人のことである」（6 頁）と述べられている。

「そういう大人に十分に巡り合えること——それは多くの『人生の問題』がそうであるように、『運』に支配されるところが大きい。しかし結局それが人生のリアリズムであり、不登校のリアリズムではないかと私は思う」（6 頁）と締めくくられている。

本書でいう「不登校」とは、「何らかの心理的、情緒的、身体的、あるいは社会的要因・背景により、

子どもが法律で定めた学校に行かない、あるいは行きたくてもいけない状態にあること。ただし、傷病や経済的な理由や親の学校教育に対する無理解等によるものを除く。また、明らかな怠学も除く」と定義されている。

また、本研究は治療論ではなく、原因論を研究対象としており、研究期間は、不登校研究が生成された1950年代から文部省による本人・家庭原因説の放棄によって不登校研究の学界における本人・家庭原因説の放棄が決定的になった1990年前後である。

本書の目次（抜粋）は以下の通りである。

- 序論
- 第1部 不登校研究前史展望
  - 第1章 不登校は戦後の現象か
  - 第2章 浮き彫りにされた不登校の子どもと関連学会の発足
- 第2部 本人・家庭原因説の主張と放棄
  - 第1章 学界における本人・家庭原因説の主張と放棄
  - 第2章 文部省による本人・家庭原因説の主張と放棄
- 第3部 わが国の不登校研究の問題点
  - 第1章 「父性の不在／父親像の弱体化」原因説の盲点
  - 第2章 「肥大した自己像」原因説の行方
  - 第3章 1980年代の教育学による不登校理解
- 結論

本書は、本論3部立てで書かれており、全9章からなる。戦前、戦中、戦後に遡って、不登校に関する文献を紐解き、第1部で、わが国において不登校研究が始まる頃までの歴史研究が試みられており、第2部では、わが国における本人・家庭原因説の主張と放棄についての考察がなされ、第3部では、本人・家庭原因説となった不登校研究の問題点の別掲が試みられている。

文科省が2018年10月25日に発表した2017年度「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題」の速報値によると、小・中学校における不登校児童生徒数は14万4031人(前年度比1万348人増)と、1966年の統計開始以降、初めて14万人に達し、過去最多を更新している。

その要因について文科省は「複合的な要因が絡み合っているので、原因を特定することは難しい」との認識を示している。

しかし、法務省により1988年11～12月にかけて実施された「不登校児人権実態調査」に基づき教師や学校も不登校の原因となりうる事が告げられるまで、その責任が問われることなく、母子関係や父性の弱体化、本人の性格や肥大した自己像など、不登校の原因のすべてが本人と家庭にあると見なされてきたのだ。また、不登校の子ども達が「放縦児」や「不良児」と呼ばれていた過去があることを本書により知らされ、胸が痛む。

序論の「先行研究展望」を読むと、著者が門真一郎の研究に出会って、不登校の研究や不登校論というものが研究対象となり得ること、また、それらが批判的に検討される必要があることを知ったことが分かる。序論の冒頭に、著者の研究の原点とも思える小澤勲、山下恒男、門真一郎らの言葉が引用されている。

「これまでも文部省・教育委員会をはじめとする教育関係者や、厚生省や児童福祉関係者が、不登校対策をいろいろと打ち出してきたにもかかわらず、その増加に歯止めがかからないということは、不登校に関する関係者の理解が根本的に誤っているからではないだろうか。」(門1995)という推論に、20数年経

た現在、不登校に関心を持っている人ならだれもが頷くだろう。

「だが、かつて自閉症家族の特異性を説いたものとの論争あるいは転向したものの自己批判的検討は全くといってよいほどなされていない。そして、このような研究者としての無責任さこそ、…今なお存在するマスコミなどの自閉症の親に対する非難を容認している一因ともなっている、といわねばならない」(小澤 1984)。

著者は、自閉症も不登校に似て、精神医学や臨床心理学による数々の研究が重ねられながら、結局当事者に対する十分な利益がもたらされていないテーマであることに着眼し、そこに食い込んでいった小澤勲の研究に批判研究の必要性や正統性や存在意義を見出し、触発されている。

自分自身、てんかんによる発達障害を抱える娘の親として、娘の「障碍」を「わがまま」と見なされ、常に「親の躰が悪い」と言われ続けただけに、小澤氏のことばも門氏のことばも身に染みる。いずれも権威に鋭い刃を突きつけ、弱い立場にあるものを守ろうとしている。まさに著者の研究者としての立ち位置と重なっている。

著者は、本書において、本人・家庭原因説を主張し、不登校の当事者を傷つけた専門家を、人を傷つけたことを理由に批判し、専門家によるそのような主張が自制できなかったのかを問うている。

第一部冒頭で、「不登校は戦後の現象である」という通説に、臨床心理学の河合隼雄氏や児童精神医学の平井信義氏の発言が関わっていることを指摘し、批判しているが、その後年代を追って、代表性の認められる専門家の責任を問うている。

著者は、精神医学や臨床心理学、そして、教育学の権威に対して、盾を突くような勇気ある研究を本書において全うしている。著者自身、学校教育になじまなかったという過去や専門家による治療の虚しさを知っているからこそ、このような研究に挑めたのではないだろうか。

師である近藤芳美は、「未来」の中野歌会で、「歌人は炭鉱で有毒ガスが発生したことをいち早く知らせるカナリヤのような存在であれ」と、しばしば語っていた。

歌人としての著者の直感に信頼を置く一人として、本書を読み、師がくりかえし述べていた「炭鉱のカナリヤ」ということばを思い、著者である山岸竜治氏が教育学のカナリヤのような存在に思えた。

本書に出会い、不登校を「治す」という前提を完全に払拭できた。もし、今後不登校の生徒に出会ったら、まずは、自分自身の姿勢を問い直し、生徒と向き合っていきたい。著者が述べる「不登校のリアリズム」が深く心に響いている。

本書は、不登校問題を考えるための必読の書ではないだろうか。不登校の原因も複雑な要因が絡み合ってきている現在、高校教師の一人として、著者による1990年以降の不登校研究及び不登校論研究を期待したい。

## 取り上げた文献

山岸竜治 2018 不登校論の研究：本人・家庭原因説と専門家の社会的責任 批評社

## 文献

門眞一郎 1995 不登校の精神生理学 こころの科学, 62, 98-102

小澤勲 1984 自閉症とは何か 悠久書房

(なつの・いづみ 歌人、私立高校英語科教諭)